

思い きては狐に化かされて道に迷い魚まで取られたと思ひ 持っていた煙草を「ポケット」から取り出し煙草に火を着け一腹して前方を見たら 小栗崎の鉄橋付近に来ていたと言う。

(化けてきた猫)

数十年前 車町の某が明日はサナブリ農家の休日だから鶏を殺さず一杯呑むかと思ひ 作業場で鶏を殺さず料理をして居るとふと用事を思い出したので鶏の料理を途中で止め作業場の戸を締めて用事を足すに出掛けた 用事が終つて作業場に歸り途中でやめた鶏の料理をするかと思ひ作業場に入つて見ると 何処から入つたのか猫が鶏の肉を喰べて居るので、「カーツ」となって怒つた某はすぐ隣りにあつた棒で猫をこの野郎とメッタ打ちにして殺し、殺した猫を数米離れた堰に捨ててしまつた。

其の晩 某は何げ無く寢床で寝て居ると ニャンニャンと悲しげな猫の泣き声にハッと目を覚ますと殺したはずの猫が天上にいて泣いておるのでは無いか 某はこの野郎と怒鳴り付け追ひ払うと今度は幽霊に化身しフワリフワリと飛んで歩くので某は怖くなり身振いす、顔も真ッ青おになりランプを灯して布団を頭から冠り其の晩は一睡もしませんでした。

某は次の朝に起きて家族の人達に昨夜の事を話すと家族の人達は猫が化けて出たのだと言つた 次の晩も 又 猫が化けて幽霊になり飛んで歩くのでした。

某は遂に「ノイローゼ」になり翌朝 霊能者へ行き拜んで貰うと霊能者は猫を殺した祟りだから八幡宮の境内に猫の絵馬の額縁を立て魚とお

神酒にお菓子をお供え 供養すると良いと言われたので早速 八幡宮境内に縦横幅各一尺位の猫の絵馬の額縁を立て供養 祈禱して貰つたら自然に猫が化け無くなったと言う。

津軽弁、嘉瀬の小話集

(3) 「又ダバレ」と「クタバレ」

最近、町の病院に東京出身で外科医の津山先生が転任してきた。患者の言葉がよくわからないので、目下津軽弁を勉強中でした。そこへ、婆さんが診療にやって来た。

「婆さま、どこ、いぐねのス」

「腰のあたり、痛くてス」

(ここまでは、先生満点であった)

津山先生、白布のかかった寝台を指差し

「そんだら、そごさ、クタバナガ」と云つた。

とたんに婆さん青白い顔は、一層青褪め、唇はワナワナと怒りに震えた。

「ナニツ、クタバレ、死んだぐネエはで、医者さ、診られねきたものを、クタバレとはなんだ」

ガサエビのように腰を折曲げて、ドアをガツチャンと鳴らし帰って行った。

「又ダバレ」と「クタバレ」「又」と「ク」のたった一字違いであったのに……

津山先生、なじぎの冷汗を拭きながら

「津軽弁は、むづかしいね」と、しょんぼり……

(木村)

特

集

50年前

その時私は

「私の五〇年前」

生き地獄の中で

木村 治利

戦後五〇年、社会は戦争の傷痕

を歴史の彼方へ忘れ去ろうとしている。しかし、社会が忘れ去ろう

とも、戦争体験者の私たちには、

戦争で受けた精神的、肉体的傷痕

は生涯癒えることなく忘れること

はできない。

戦争は、理論や真理、学問、休憩など必要なかった。日夜、生きるか死ぬかの惨酷非道な戦闘の繰返しのみであった。

奇跡にも生き残った私は、人生最大の貴重体験であつたと思う。

唯々、お国の為にと純粋な一念のまま、大人と一緒に戦争に志願し、

若い生命を散らした。何と無分別な、馬鹿な少年たちと、現代では一笑



に付されるであろう。

けれど、今なほ、南海に、北の海底に、眠っている海軍最年少兵当時一四、五才の同期の桜に「同期よ、安らかに眠れ」と念じつつ、私は、この一拙文を書く。

貨物船轟沈す

昭和二〇年二月二十九日、輸送船団が石垣島突端の平久保半島を見たのは、佐世保出港以来実に十四日目の朝であった。

護衛艦の海防艦「福江」と貨物船二隻は、漸やく目的地石垣港に到着しようとしていた。

石垣島は、琉球諸島の南西郡、八重山諸島の東部にある面積二五八平方キロの小島で、南北両岩には平均四〇〇メートルの山脈が東西に走り、中央部には標高八〇〇メートルの台地、最高は五二〇メートルの於茂登山がある。

今、この島は、沖繩決戦に備へ、於茂登山を拠点に島全体が蜂の巣のように地下陣地となつて要塞化され、本土から弾薬、糧食、燃料を満載した船団が、次々と来港、補給が続けられていた。

と、いうのも二月十九日、丁度十日前、米軍は小笠原諸島の南方太平洋上の小島、面積二〇平方キロの硫黄島に上陸したのである。

硫黄島は本土防衛戦の一環として確保せんと、兵力二万名の守備隊で固守し、水際から全島にわたり地下洞窟陣地となつていた。これに対し上陸した米軍海兵隊は約六万一千名といわれ、摺鉢山の攻防は血で血を洗う激烈な死闘が日夜続けられ、支援する兵力もなく、孤立無援、独力で固守していた。(註約一ヶ月後三月十七日全軍玉砕した)

硫黄島が陥落すれば、米軍はここを基地とし、連日連夜本土を空襲す

「魚雷命中だ」、積載してある弾火薬の誘爆か、雷鳴のような爆発音と共に火柱が吹上げ、船はけいれんを起したかのように見震いして、静かに船尾から沈み始めた。

船首が直角に立ち、赤い船底が見えたとき、船と共に沈んでいく乗組員の怨念のような、うらみ深い色合いの気がして、胸が強くしめつけられた。やがて貨物船は波間に姿を没した。その瞬間、巨大な渦巻が音を立てて逆巻き、附近海面を泳いでいた乗組員は、この大きな渦に吸い込まれて、深く深く沈んでいった。

僅か二、三分のあいだであった。

再度「戦闘配置」である、敵潜を探知するのが水測員の任務だ。私は探信儀室へと走った。同期の鯨井上水、富樫一水も走ってくる。

「面舵一杯」艦長の声、続いて「面舵いっぱい」操舵員の声が、艦橋からの伝声管を通じて聞える。「前進、全速」艦は大きく左傾し、右に施回、全速力で現場に向う。

私と、鯨井上水がレシバーをつけた。確かに反響音がある。富樫一水が伝声管に口をつけて呼んだ。

「右三〇度、反響音、一五〇〇」

「面舵三〇度」「よーそろー」、艦橋のざわめきが聞える。

反響音がだんだん近づき、大きくなる。

「右五度、反響音、一〇〇〇」、「爆雷投下用意」「爆雷投下用意よしっ」、「探信儀あげえー」漸やく探信儀室に命令がくだる。水中音波用水晶板が爆雷の爆発音によって破壊されるので、水倉内に格納してから爆雷を投下するのだ。

探信儀が上ってくる迄一〇秒程かゝる、これがやたら長く感じられた。

ることになろう。まして完全に制空権を握った米軍は、飛石づたいに沖縄島攻撃することは必死である。沖縄島を失ふことは、日本本土の喉筋に短刀をつきつけられたも同然である。

沖縄列島周辺には、敵潜水艦がむらがり日本と沖縄を結ぶ補給路を寸断せんと、待ち伏せしている。

船団が、屋良部半島を迂回し、名蔵湾に入ろうとしていたときだった。突然「ゴウーオン」と爆音が聞えたかと思うと、米軍のPBY偵察機一機が三〇〇メートルの上空から海防艦めがけて急降下してきた。

「あっ」と思う間もなく、目前に迫った米機は、艦を縦断し、マストすれすれに飛び越えると、ぐいと機首を持ち上げ、陽光に翼をきらりと光らせ、轟音を響かせて飛び去った。

「探信儀室」から甲板に出たばかりの私は、思わず血が凍りついたように硬直し、立ちすくんだ。

しかし、米機は何ら攻撃せず、無電で「また、会おう」と打電し、艦尾に消えていった。

船団は、敵潜に進路を悟られぬようジグザグ蛇航を繰返していた。

艦内は犠牲者も、損害も皆無で全く奇跡であった。見張員は「準戦闘配置」で、艦橋三名、望楼一名、左右機銃台二名、艦尾一名、計七名いたのに敵機には誰一人気付かなかった。又それ程敵潜の見張りに水面を重視していた。

私は「命拾ひした」と思い乍ら、上甲板から兵員室に降りようとラッタルに足をかけたときだった。「突如」「ドッカーン」という大音響と共に、一、〇〇〇メートル程離れていた貨物船の一隻から紅蓮の炎と真黒な爆煙がむくむくと上り始めた。

「探信儀よしっ」「深度七〇、爆雷投下、撃てえ」艦長の声が聞える。

二〇秒、三〇秒、艦は全速力で走り、その白い航跡にしぶきがあがる。

閃光が一瞬走り、大音響で爆発すると辺りに渦巻が湧く。艦は見えざる敵潜水艦を追って、遮二無二突っ込んで狂ったように爆雷を投下した。

艦は二時間近く対潜掃討に従事した。爆雷が爆発する度に腹にズシンズシンと応え、附近に腹綿の破れた大魚が幾匹も浮んだ。

海防艦の任務は、敵潜掃蕩と船団護衛であるが、敵潜掃蕩は不断の索敵と執ような攻撃に終始するが船団護衛は少し違う。待ち伏せる敵を避け、避けられない場合は、叩き潰して通るし、攻撃をうければ反撃もするが、決して深追いはしない。それは守備位置を離れたとき、第二の敵に船団がやられると、元も子もないからだ。米機は、潜水艦攻撃を援助する陽動作戦に飛来し、見張員を空に集中させ、その間隙をぬって敵潜は貨物船を轟沈させたのだ。

特攻艇、震洋の荷揚げ

石垣島の海岸は湾入は多いが、裾礁が発達して島へ近づけず良港には恵まれていない。右舷に竹馬島が近づき、切割したような島と島の間を通り抜け、石垣港湾に入った。

石垣島は、濃い緑の樹木に包まれ、集落は殆んど見えない、低い軒先を石垣で囲い、敵重な防風壁を造っていた。毎年の台風襲来に備えての防響体制が出来上っているのだ。

午後四時二〇分石垣港へ到着したが近づけず二海里沖に錨泊した。

敵機の攻撃を受け座礁したのか、貨物船が二隻島の近くで傾斜したり、マストを残して沈没していた。

棧橋から焼玉エンジンを響かせ発動機船が近づいてくる。一足先に到着していた貨物船はすでに荷揚作業を始めグレーンが急しく動いていた。

「空襲がありますので、荷揚げを急いで下さい」舳先に立った船員がメガホンで呼ぶ。我々兵たちは、休む間もなくブチブチ云い乍らも一秒を争うべく、艦橋前の積載物をハシケに降ろすため集まった。「やっとここまで運んで、沈没では水の泡だもねえ」と誰かが笑らわせた。大箱は重い荷物で二十人程の兵でやっと持上る程だ。

二月十五日佐世保港を出港した翌日、艦は済州島に寄港した。霧が深く港は見えず艦はやたら汽笛を鳴らしたのだが、突然「大発」が近づいて、この大箱を積載した。

通常、護衛艦が、物資輸送などするわけがない。下士官たちは、「この大箱は炸薬艇と云う特攻隊用の船だ」と話していた。

船の全長六六、機関の前部に、火薬一〇〇キロを積み、敵艦に体当たりして撃沈させ、自爆する、特攻艇であった。

敵艦の心臓を寒からしめた「回天」は、潜航して敵艦に体当たりするが、炸薬艇は夜襲戦専門で、六〇ノット（時速二一〇キロ）の猛スピードで敵艦に接近、舵を固定し、体当り直前乗組員は海中に飛び込むという。

「回天」（人間魚雷）に比べ、建造費は三分の一、しかも簡単に建造できるが、敵艦に発見され易く、前部に火薬が積んであるため、すぐ爆破される恐れがあり、全くの消耗品的存在だった。沖縄決戦に備え、敵艦に体当りする決死隊の秘密兵器の一つで、震洋（体あたりボート）である。

この大箱を降ろす責任者は、鯨ヶ沢町出身の山下准慰であった。

大箱は、二〇人の兵たちでも中々持ちあがらない。力を入れるのが、

「祖国から こんなに遠く離れた南海で、藻屑と消えるのは嫌だ、どうせ散る桜なら、祖国の土の上で死にたい」こんな思いが一瞬私の脳裏をかすめる。

敵機は水平攻撃一回で終わった。爆弾が左舷後部の海中に落下したが、被害はなく、間もなく対空戦闘は解除された。

この戦闘で、重傷者二名、軽傷者四名、艦の被害はトイレの水槽が被弾した被害だけだった。

軍人精神はバッテリー

大箱の荷揚げも終り、「やれ、やれ」という気持で兵員室に降りると、室内の殺伐な空気の漂よいを察知した。

兵たちは、釣床の立ててある格納所の片隅に膝を抱き、半分泣きべそをかき、真青な顔で恐怖におののいている。まるで狼に囲まれた小羊同然にしょげて……

「発見が速ければ、撃墜できたんだ」

「こっちで発砲すれば、敵機も攻撃してくる、そうなれば潜水艦の攻撃も防げたんだ」「二十五ミリ（機銃）を撃って見たかった」

「今の兵たちは、軍人精神が入っておらん」

丸裸で妻揚子を喰わいた下士官たちが、ひまな身体を持って余すように、寝そべって、時々ちらっと残忍な視線を兵たちに向けていた。

同期の鯨井上水が、素知らぬ振して私の側にすり寄ってきた。

「見張の責任を我々兵に押し付け、それを口実に甲板整理で徹底的に油をしぼるんだ」と彼の低い声は震っていた。

彼の目の回りも黒ぶちに色どられている。兵たちはみんな疲れていた

まぢまぢなのだ。

「何をやっている、いいが、号令かけるぞっ」

山下准慰は、私と二人青森県出身の乗組員だった。草相撲の横綱で身体が大きく、口唇の厚い、色が白く肉がだぶついている五十近くの、オジサン応召将校であった。左手で脇腹をポンポン叩くのは、マワシを叩いたくせである。津軽弁のナマリが抜け切らず、乗組将校から「津軽のオド」のあだ名で呼ばれている。

「みんな箱の回りにつげいー」「いいが、一、二のタナゲー」

気合よく号令かけたが「タナゲー」の津軽弁がわからず兵たちは、顔を見合わせ力を入れなかった。

山下准慰は、自分が馬鹿にされているとも思ったのか顔を真赤にして、

「タナゲーといったら、タナゲー」とどなった。

私は両手でみんなに合図を送り、どうにか大箱一つを「ハシケ」に積んだ。

二つ目の箱に移動したとき、見張員が絶叫した。

「敵機来襲、左四〇度」。背後の竹馬島上空からグラマン二機がものすごい速さで本艦めがけて突っ込んできた。

「対空戦闘配置につけいー」ラッパが鳴り響く。

「ピュッ」「ピュッ」と水柱が並んで走る。敵機の機銃掃射だ。

「ガン・ガン・ガン」と鉄板を撃つ破る音、私たちはデッキの上を四つん這えになり、すばやく荒天通路に入り、機銃台に走った。

冷汗が、背中を走り、むやみに喉が渇く、戦争はまだ終わっていないのだと実感した。

航海中は「生か死か」の瀬戸際の戦いが日夜続けられる。見張番に立たされるのは兵のみだ、昼二時間、深夜二時間は毎日、そのほか下士官の代理当直をやらされるので、眠る時間は殆んどない。しかも今回は沖縄那覇港到着目前にした二十四日夜、輸送船四隻が敵潜の魚雷攻撃で沈没している。そのたびに戦闘配置となり、十二時間勤務となっている。

二十五日那覇港に着くなり、下士官たちは「気合いが入っておらん」と、バッテリーで兵の尻を五ツ六ツと減多打ちにしたのである。

尻はミミズ腫れ、痛さに耐えながらアヒルのようにヨチヨチ歩きた。

下士官たちの食事の支度、後片付、靴磨き、洗面器磨き、甲板掃除など一分の間隔もなく酷使される。全くの奴隷生活が世界最強の日本海軍だと、うそぶいていた。

兵は、少しの不眠、反抗的言語、サボリは絶対許されない。まして一口でも理屈など言えば、バッテリーで半殺しにされる。

先般「酒保」から菓子袋一ヶ盗んで見つかった兵がいる。彼は逆さに吊され、ブランコのように大きく動かされ、返つてくるとバッテリーで殴られた。意識を失うと顔を海水につけ、又動かし、五〇回程バッテリーを貰った、バッテリーは、日本海軍の伝統であり、軍人精神が鍛えられると下士官たちは云っている。

我々十四、五才の少年兵は、ただ恐怖に震えるのみだ。部下をこれ程までに野蛮な暴力でいじめ、戦争に勝てるわけがない。その恐怖から逃れる為、特攻隊志願者は生れるが、その反面逃亡者、自殺者もあった。

その夜九時、甲板士官の掃除点検が終り、兵たちは黙々と下士官の短靴、洗面器磨きにとりかかった。

タラップの下で櫂の棒を杖にしてじっと憎悪に満ちた目で兵を睨んで

いた吉岡二曹が、「終ったら、甲板に整理しろ」と低いドスのある声で呼んだ。「くるものは、きたか」私は心の中でつぶやいた。

戦闘を続けるよりも、下士官たちから日夜受ける精神的、肉体的重圧に耐えるのが苦痛であった。

早く煮るなり、焼くなりしてくれ、どうせながい生命ではないのだ。そんな捨て鉢の気持ちになってくる。

第二分隊は、第一班が浅雷班十二名、第二班は我々水中測的班六名で下士官八名、兵が十名である。兵員室は三番砲塔のすぐ下から艦尾のスクリュウの付根までで、台風などの荒天にはスクリュウが波の上につきあげられ空転する。その金属音が耳について、最初の頃は眠れなかった。

吉岡は、任官したての新米だが「一日一回バッテリーを振りまわさんと飯がまづくていかん」などと、兵を殴ることが好きなスポーツでもやるように思っている男だ。彼は元暴力団幹部だといわれる。

「軍隊の飯を三回食つたらやめられぬ」とは下山二曹の弁である。彼ら二十五、六才の若者から見れば、我々十四、五才の少年は赤子の手ねじるようなもので、いくら殴っても天皇陛下の為だとうそぶく。

兵は、必ず一日に何度かは殴られる。タラップの昇降が遅い、音を立てたのが悪い、口のきき方が悪い、返事が遅いなど、何でもない事にも文句をつけ、半殺しにする程殴りつけるのだ。

私は、タラップを登るとき、死刑囚が、死刑台の階段を登る心境も、同じだろうと思った。

鳥影が海に浮び、高い樹木の上に淡い月影があった。静かな、暖かい夜だった、いよいよ決戦となる運命の日が、刻々と近づいていた。

兵たちは、三番砲塔の前に二列横隊に並んだ、無性に身体が震える。

殴られたかは知らない、ただ顔中がぼろーとほてり、神経が異常に高ぶり、恥も外聞もなく、物もよく見えなかった。夢中で再びバッテリーの前に両手をあげ立った。吉岡は力一杯バッテリーを振り回した。私はじっと歯を喰いしばってこらえている。もはや私の神経は麻痺し、痛みを取越し、狂人になっていた。「七ッ」ほど打たれて「次ッ」の音が聞えた。「これでやっと終わったのだ」と思うと、急に涙がでてきた。尻の盛り部が、ズキンズキンと脈を打つ、そつと後に手を回し、ズボンの上からそつとなでた。

整列が終ったのは、十一時を過ぎていた。兵たちは黙々と後を片付け兵員室に降りた。

私は三時から見張番だ、早く眠ろうと思えば思う程、尻の疼痛を覚え眠れなかった。

隣の釣床の藤田上水が、しゃくりあげていた。今日は彼の十六才の誕生日であった。

軍隊は大人の世界だ、生きるか死ぬかの戦いだ、恐怖と苦痛の軍隊生活は、やはり十四、五才の少年には到底無理な勤務であった。

だからといって、貧農の子に与いられた生活の糧は、他にあったらどうか、国策に沿って少年は志願し、むさむさと若い生命を南海に散らしていったのである。

対空戦闘、受傷

青空が一杯に広がり、波の静かな朝を迎えた。

「総員起床」のあとすぐ「甲板掃除」の号令がかかる。艦は停泊すると、甲板掃除がやたら多くなる。食前食後一日七、八回は掃除がある。

甲板整理は、古参者から順番に兵に文句をつける。入団が三ヶ月早いと、天皇陛下の命令と稱し絶対権限を有する。いくらバッテリーやアゴの蛮行を行なっても正當と認められるのだ。軍隊の階級性と云うものだ。吉岡は、列の中央に進み出た（彼は私たちより三ヶ月入団が早い）

「貴様ら、この頃気合が抜けている。敵機の来襲があったからといって、ビクビクするな、動作がぶい、今夜は帝国海軍の軍人精神を入れてやる。わかったかッ」

「はいッ」

「一人づつ 前に出ろッ」

私は最初に一步進み出た。何本打たれるかわからないが、同僚の苦痛を見ながら待つのは、余りにも自分がみじめだ。「どうにでもなれ」そんな気持が心のどこかにひそんでいた。

「手を、あげる、半歩ひらけッ」

私は腰をやや後に引き、身体を前のめりにし前傾姿勢をとった。吉岡は私の右後ろに回り、櫂の棒を最上段に構え、力一杯打ちおろした。

「ブスッ」と、ぶい音をたてて櫂棒は私の尻の肉に喰い込んできた。

真赤な火箸をあてられたような激痛を、じっと呼吸を止めてこらえる。骨肉がバラバラに砕けたようだ。

「う、うーッ」思わず呻声のでてしまう、私の不覚だった、腰がのびて一歩前によろめく。すかさず横で見ている下山二曹が「この野郎ッ」と、憎々しげに罵辱の声を発し近づき「貴様ッ」舌打ちしながら、目玉をギョロギョロさせ、私の襟元を力一杯ひき

「歯を、喰いしばれッ」下山の鉄拳が私のアゴに右、左と炸裂した。

その度に私の目先からコンペイトのような星が幾つも飛び散った。何発

先づ下士官や古参兵が海水を汲み上げ甲板に流すと、素足になった兵たちがタワシを持ってリノリウムについた油の汚れや塩水で白くなった部分を洗い落とす。これが北海洋の冬の甲板掃除は素足が凍りつき、その冷たさに狂人の如くこすり続ける。

汚れを一通り洗い落とすと、麻糸を束にした七〇号程（一見オシラ様のような）の雑布で、水を拭きとりいよいよ油雑布で磨きをかける。

腰を落して片足を延ばし、一方を縮めそれを交互に手早くこすり前進してゆく、兵の周囲には、櫂の棒を持った下士官共が並び、落伍者や手数少ない者を叩きのめそうと待ち構えている。

折返点に着くや「廻れッ」と、棒で（バッテリー）甲板を打ちならし、号令をかける。また出発点に向って黙々とこすり続け前進してゆく。

「廻れッ」落伍者が出る迄、何度も繰返すのだ。

昨夜甲板整理で殴られた尻の傷痕がさけたのか、激しく痛みだした。「こらッ、元気がないぞッ」罵声が飛び、私の尻にバッテリーが炸裂した。焼印を押されたようにぼろーと熱くなり、気が狂いそうだ。

このことを予想し、腹巻を尻の盛りりまでさげ、バッテリーに対処していたのだが、殴られたときの音が違っていると、二ツ追加して打たれた。思わずつんのめる。

艦の乗組員の九〇％は、痔やインキン・タムシに罹っている。釣り床の中は、ノミ・シラミ・南京虫の巣窟だ、これが帝国海軍でなのだ。

午後一時三〇分、電波探信儀が敵機を捕捉する。

艦は直ちに抜錨、エンヂン始動、前進微速で動き始めた。

「対空戦闘配置につけッ」艦内に非常ラッパが響き渡る。乗組員は、鉄カブトに身を固め、持場に走った。

「右一〇度、敵機発見、接近します」見張員が絶叫する。

「対空戦闘用意」「対空戦闘用意よし」艦内は、緊張感がみなぎる。

「面舵一〇度」沈着な艦長の声、「おもかじ一〇度」、操舵員復唱

「ヨーソロ、進路はそのまま」

「右五度、高角一〇度、敵グラマン三〇機、本艦に近づきまーす」

みるみる敵機は近づいてくる。身体がケイレンを起したように震える。艦は真正面に敵機を向い撃つ積りだ。

米機の新鋭グラマン三〇機は、三機づつ編隊を組み、接近したが、大きく右に施回し、艦の右側面から急降下し、尾翼から黒煙を吐き乍ら攻撃してきた。一三機銃弾が、ピューピューとかすめ飛ぶ。

艦の荒天通路の鉄板にパンパンと当る音は、ドラム缶の中に入れられて叩かれているような大きな音だった。

暗褐色の硝煙の中を、敵機は軽く身をひねり陽光にきらめき乍ら、急降下してくる。

対空砲火の弾幕を押し分け、赤く飛びかう曳光弾を切り抜けて、次から次へと一本の棒になって、息もつかせぬ猛攻である。

まるで肩をしぼめた「鷹」が獲物におそいかかるように遮二無二突っ込んでくる。と思う間もなく目前に迫った敵機はぐいと機首を持ち上げ、轟音と共にマストを飛び越え、機体をひねって投弾してゆく。その度に艦の右、左、艦尾に水柱が林立する。間一髪で被弾を逃れる。

死闘の連続だ。

我々二分隊は「対空戦闘」になると、二五機銃弾が弾薬庫から昇降機によって運ばれてくるのを降し、機銃砲台に運ぶ任務となる。

昇降機は荒天通路の入口近くにある。弾薬を持って入口を出ようとし

への昇降口も海水が入らぬようにこの通路の中にあつた。

又、烹炊所、便所、食糧倉庫などは通路の片側にある。通路は歩くところ巾一尺、高さ二尺しかない。

私は両手で両壁を押え、片足で飛び乍ら前部へ進んだ。電線が切断されたのか、通路の中は真暗、脛の当り迄入り込んだ海水はどろどろと血と油の水槽と化していた。

その水槽の中、同僚が一人、二人とうつぶせになり倒れている。

全くの地獄繪図であつた。

私は、それを救助する力も、元気もなく、ただよろけ乍ら、同僚を飛び込めた。「苦しいっ」防毒面マスクをつければ、きつと案になる。そのことしか念頭になつた。

戦友の死

十尺程進むと通路は、艦の煙突に突当り、直角に右折し七、八尺で、探信儀室に降りられる。

烹炊所前を通り、煙突のすぐ近くに来たときである。機関室附近から激烈な爆発音があがり、同時に物凄い勢いで真白な蒸気が噴出してきた。爆弾が命中したのだ。振返ると烹炊所も通路も蒸気に包まれ何も見えな

い。熱風が吹きつけて前進も後進もできず、私はその場に立ちすくんだ。通路との仕切が高い烹炊所には水が入っていなかった。ふだん烹炊所

に入らうものなら忽ち泥棒にされ、往復ビンタ位ではすまされない。私は両壁を突っぱり乍ら仕切を飛び越えた。甲板が油と血でぬらぬらと滑る。

「く、る、し、いっ」呻き声が聞える。吉田上水だ。彼は宮城県出身

たとき、鉄板に突当つた機銃弾が物凄い爆発音を響かせ炸裂した。

第二群の攻撃が始まったのだ。

通路の屋根上に取付けられた水槽タンクが機銃弾で穴があき、海水が流れ、通路は水浸しになっていた。

と、そのとき、私は突然、脳天を金槌で殴られた衝撃を感じ、その場に意識を失なつて倒れた。

自分が水浸しになっていることを意識したのは、第三群の機銃弾の爆発音を聞いてからだ。

とにかく、この通路から抜け出さねばならないと思った。

作業衣は、びしょ濡れだが、身体はどこにも痛みもなかった。しかし、起き上ろうとしたとき、下半身が麻痺したように力が入らない。

通路の鉄板は、いぐりとりれたように穴があき、そこから陽光がまぶしく線を引いていた。

私は静かに右手を延ばして腰の辺りから股、膝と作業衣の上から手を滑らせた、「はっ」と手を引っ込める、ズボンが膝頭の辺りから、刃物で切られたように割がれている。短靴が吹飛んで見えなかった。

艦は火災を起したのか、白煙がもくもくと入ってきて喉が痛い、ガスだ、防毒面マスクだ、何故か突差にそう思った。マスクは、艦の前部の探信儀室にある。私はそこ迄取るに行こうと思ひ、通路の鉄壁にもたれ乍ら立上つた。途端に「ダダン、ダン、ダン」と機銃弾が鉄板と通り抜ける。「こんな処で死ぬのは嫌だ」と思ひ乍らも、水槽のように水の入つた通路に倒れた。

荒天通路は、時化で上甲板が波に洗われ歩けないとき、この通路を利用する為に甲板上に構築してあり、士官室、機関室、通信室、探信儀室

で十六才、紅顔の美少年であつた。

「どうしたっ」私も、甲板に横這えになり声をかけた。

「やられたっ」吉田は腹部をきつく押えているが、その指間から小腸の一部が露出し、血がしたたり落ちている。彼の顔はローソクのように白くすでに血の気がなくなつていた。

「のどが渇く、水をくれっ」蚊のなくように弱々しい、水を飲ませたら、最後になるだろう。

「しっかりと首をたれた、少し我慢しろっ」

再び機銃弾が、烈しく鉄板を撃ち破る音が聞えた。

敵の攻撃中にも、台風一過、一瞬真空状態のときがある。体制を整える僅かの間隙であつた。

「う、う、う」と唸っていた吉田は「お母アさん」小さく一言呼んで、がっくりと首をたれた。

「吉田っ…吉田っ」ゆり動したが返事はなく、こと切れていた。

全身血だるまで、身をよじらせ乍ら通路から這い上つてきたのは、秋田県出身の佐藤要蔵上水だった。

佐藤は応召兵だ、小学校の先生とかで、子ども三人と美人の奥さんの写真をよく見せてくれた。「痛いっ、ここ縛ってけれっ」、佐藤の右太腿部は、ぼきんと折れている。彼の腕に巻いてある和手拭で、傷の上を縛つたが、力が入らない。

「佐藤っ、眠っちゃいけない」私は彼の顔を叩いたが、静かに目を閉じた。私も睡魔におそわれてきた。心の動揺も不安もなく、意識が次第にもうろうとしていく。

吉田上水は「お母さん」に何を語ろうとしたのか、その一言が何時ま